鳥取県西部地震による新見市千屋地区被災高齢者への支援活動の報告
その1 被害状況とボランティアとして短大の果した役割

古城 幸子 木下 香織 真壁 幸子
金山 時恵 土井 英子

災害管理学

The Report of Support Activities for the Elderly Victims of Tottori West Earthquake at Chiya Area in Niimi
1) Damage Condition and a Role Niimi College Played as Volunteers

Sachiko KOJO Kaori KINOSHITA Sachiko MAKABE
Tokie KANAYAMA Hideko DOI
(2001年11月1日受理)

2000年10月6日午後1時30分ごろ発生した鳥取県西部地震は、鳥取県西部を震源として震度6強の強い地震であった。鳥取県と隣接する新見市千屋地区では、その影響を受け、強い揺れと共に、家屋の半壊や屋崩れ、道路の損壊など多くの被害を受けた。高齢化のすすんだ新見市の中でも、千屋地区は特に高齢化率の高い地域であり、独居高齢者や高齢者世帯が全体数の3割を占める地域である。今回の地震では地区全体が被災者となっており、地区住民のみでの復興には困難な状況にあった。震災直後に新見市内外のボランティア組織が地域に入れて活動を行なった。一方、本学では、地震後1ヶ月目から高齢者世帯を訪問するという活動を有志の学生と教員で開始し、その後全学的なサポートを得て、第2期・第3期とボランティア活動として継続している。鳥取県西部地震による被害状況とボランティア活動の実際をまとめ、ボランティアとして短大が果した役割を明らかにしたい。

はじめに

2000年10月6日金曜日の午後1時30分ごろ発生した鳥取県西部地震は、鳥取県西部を震源として震度6強の強い地震であった。鳥取県と隣接する新見市千屋地区では、その影響を受け、強い揺れと共に、家屋の半壊や屋崩れ、道路の損壊など多くの被害を受けた。辛い人間の被害はなかったものの、地区住民に与えた恐怖や不安感は大きいものであったと推察する。

地震後1ヶ月目から高齢者世帯を訪問するというボランティア活動を、有志の学生と教員で開始したが、その後全学的なサポートを得て、第2期・第3期と継続することができた。第2期は訪問活動の他に市の高齢者介護予防事業の一つである千屋ふれあいサロンへの参加や、第3期はさらに震災1周年の2001年10月6日に行われたメモリアルコンサートへも協賛した。

今回、これらの活動をまとめることで、今後このような災害時に短大が果すことのできる役割は何かを明らかにし、地域に貢献できる短大のあり方を模索したい。
I. 新見市千屋地区の概況

新見市千屋地区は新見市の北部で、岡山県と鳥取県の県境に位置しており、鳥取県西部地震の震源地に購入している。そのため鳥取県西部地震における千屋地区の揺れ感度5強を観測された。また、千屋地区は冬の寒さが厳しく、岡山県の中でも豪雪地帯として知られている。被災者は、再興作業が終わらないまま、厳しい冬を越さなければならない状況であった。

新見市の人口は24,513人（平成13年6月30日現在）である。千屋地区の人口は1,199人（平成12年10月31日現在）であり、新見市の人口の4.9%である。千屋地区的65歳以上の人口は486人、高齢化率は約40.5%である。千屋地区的高齢化率は、全国の高齢化率16.7%（平成11年）と、岡山県高齢化率20.1%（平成12年10月1日現在）と比較して高く、新見市の高齢化率28.8%（平成12年）と比べても高値を示している。また、千屋地区的全世帯数は394世帯である。その中で、独居高齢者が38世帯、高齢者世帯72世帯あり、これらの世帯数は全世帯数の30.5%を占めている。

II. 千屋地区的被災状況

鳥取県西部地震における新見市の被災状況は、表1のとおりである。水道・電気などのライフラインの損壊が大きな被害をもたらしたが、地震直後は土木構造物の建物破壊や水漏れを起こした。また、建物の損壊、国道・県道の亀裂、落石、陥没などが相次ぎ、特に、千屋小学校は校舎の崩壊を含む Graveyard で強力に地割れが見られたなどの被害を受け、余震により土砂が校舎内に流れ込む危険性があった。鳥取県西部地震における新見市の住家被害状況は表2のとおりである（平成13年3月5日現在）。全壊6棟、半壊24棟はいずれも千屋地区的被害であった。全被害572棟のうち千屋地区的被害は319棟であり、千屋地区的被害は新見市の全体の被害の49%を占めている。一部関係者では、屋根瓦が壊れたり、壁が崩れたりする被害が起こった。また、食器棚の食器が破損し、足の踏み場が細のような状況もあった。

III. 被害対策の実状

新見市健康福祉課、阿新地方振興局保健課の対応を中心に述べる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1．鳥取県西部地震による新見市の被災状況</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>傷害者</th>
<th>重傷</th>
<th>軽傷</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>徳島</td>
<td>2人</td>
<td>2人</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>住家被害</th>
<th>部屋</th>
<th>外部</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全壊</td>
<td>5棟</td>
<td>5棟</td>
</tr>
<tr>
<td>半壊</td>
<td>4棟</td>
<td>4棟</td>
</tr>
<tr>
<td>全壊</td>
<td>6棟</td>
<td>6棟</td>
</tr>
<tr>
<td>半壊</td>
<td>3棟</td>
<td>3棟</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>非住家被害</th>
<th>非住家</th>
<th>部屋</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全壊</td>
<td>12棟</td>
<td>12棟</td>
</tr>
<tr>
<td>半壊</td>
<td>4棟</td>
<td>4棟</td>
</tr>
<tr>
<td>全壊</td>
<td>24検査</td>
<td>24検査</td>
</tr>
<tr>
<td>半壊</td>
<td>22検査</td>
<td>22検査</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>仮設施設</th>
<th>仮設</th>
<th>実施</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>建物</td>
<td>4棟</td>
<td>4棟</td>
</tr>
<tr>
<td>仮設</td>
<td>32検査</td>
<td>32検査</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>道路</th>
<th>長さ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>県道</td>
<td>7道</td>
</tr>
<tr>
<td>市道</td>
<td>5道</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>電車</th>
<th>電車</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1機</td>
<td>1機</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>水道</th>
<th>水道</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>8道</td>
<td>8道</td>
</tr>
<tr>
<td>7道</td>
<td>7道</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>穴口</th>
<th>穴口</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>14検査</td>
<td>14検査</td>
</tr>
<tr>
<td>13検査</td>
<td>13検査</td>
</tr>
<tr>
<td>13検査</td>
<td>13検査</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>ブロック</th>
<th>ブロック</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>11検査</td>
<td>11検査</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>表2．鳥取県西部地震住家被害集計表</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>住家</th>
<th>111</th>
<th>111</th>
<th>111</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>建物</td>
<td>245</td>
<td>245</td>
<td>245</td>
</tr>
<tr>
<td>仮設</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
</tr>
<tr>
<td>仮設</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>表3．鳥取県西部地震住家被害集計表</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>現状</th>
<th>111</th>
<th>111</th>
<th>111</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>建物</td>
<td>245</td>
<td>245</td>
<td>245</td>
</tr>
<tr>
<td>仮設</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
</tr>
<tr>
<td>仮設</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
<td>121</td>
</tr>
</tbody>
</table>

| 計 | 627 | 627 | 627 |

| 計 | 627 | 627 | 627 |

| 計 | 627 | 627 | 627 |
10月6日、地震発生と同時に新見市役所などで
災害対策本部を設置、阿新地方振興局は非常事態
に備えた対応がされた。

同日午後、新見市山村発電センターに避難所が
開設され、新見市保健婦5名が待機した。同日夜
には千屋市民センターにも避難所が開設され、市
保健婦が対応にあたった。千屋市民センター避難
所では、6日には4世帯10名（高齢者夫婦3組、
母と子ども3人）、7日には4名（高齢者夫婦2
組）、8日には2名（高齢者夫婦）の避難者が
あった。

10月9日新見市健康福祉課職員により、市内独居
高齢者世帯に対して電話による安否確認（561
件）と、千屋地区独居高齢者への訪問（43件）が
なされた。

阿新地方振興局保健課でも、7日から精神障害
者への訪問と情報収集がなされていたが、10日か
らは新見市と阿新地方振興局との連絡を取り合っ
た。新見市と阿新地方振興局で高齢者の名簿を共
有し、民生委員からの情報も加えながら高齢者世
帯への訪問（独居48世帯、高齢者世帯27世帯、そ
の他4世帯）が3日まで行われた。「後えてのため
に震災当時のことが思い出されるため気が休まら
ない」「入浴中や睡眠中に地震があったらと思う
と入浴することやパジャマで休むことができな
い」との訴えがあった。高齢者の様子から、誰
かに不安な気持ちを話すことで助かっている
ことが感じられ、精神科医も訪問チームに加えての訪
問が行われた。震災から1ヶ月経った11月13
日、千屋地区独居・高齢者世帯のうち、避難など
で訪問できなかった方を対象に訪問（18件）が行
われた。継続的な訪問が必要なケースについては
新見市と阿新地方振興局が連携を取りながら
継続訪問が行われている。

同時に、新見市は地震などで健康に不安がある
千屋地区民を対象に健康相談を行った。10月12
日、16日、18日3日間、健康相談の結果説明会とあ
わせての実施となった。116名の参加があり、「震
災後、不安で眠れない」「連日の除草作業や片づ
けてくたびれた」などの訴えがあった。

また、震災5ヶ月後の平成13年2月の新見市報
にPTSD（心的外傷後ストレス症候群）について
掲載したところ、診療所への受診者が増加し、
「眠れない」「イライラする」「独りでいられない」
「元気が出ない」などの訴えがあった。

IV. 千屋地区震災ボランティアの実際

1. ボランティアの位置付け

地震発生直後、新見市長を本部長として新見市
に災害対策本部が設置された。

新見市の災害対策規程（昭和58年1月19日調令
第1号）では、ボランティアに関する対応につい
ては明記されていない。今回の震災時にはボラン
ティアの取りまとめを千屋市民センターが行って
いたように、緊急時にその場その場で組織される
状態だったと考えられる。しかし、市内外から申
し込まれるボランティアへの対応や、ボランティ
アを活用する場の選定など苦慮された面が多くか
かったのではないかと推察する。マニュアルや方針
を整備された組織づくりが出てくるような準備が今
後は必要となると思われる。

2. 千屋地区におけるボランティアの実際

新聞各紙による報道の内容と、震災当時、千屋
市民センター所長をされていた田中賢氏へのイン
タビューから、千屋地区におけるボランティアの
実際を述べる。

新見市職員有志、阿新ほほの住宅研究会員ら
で組織するボランティア救急部隊16名が10月13日
〜15日、千屋地区での活動を行った。新見市総務
課の呼びかけによるもので、集会所、公会堂、要
請があった避難世帯などの片付け、屋根の雨漏り
防止シート掛け、建物の仮補修などの作業が行わ
られた（備北民報平成12年10月13日付）。

10月30日、千屋地区市民グループ「千屋地域づ
くり推進委員会」は千屋市民センターにボラン
ティアセンターを開設した。新見市地域防災計画
震災対策マニュアルでは、市社会福祉協議会がボ
ランティアのコーディネートを務めることになっ
ていたが、同協議会がボランティアの窓口である
ことを知らせる住民は少なく、被害の大きかった鳥取
県日野町へ問い合わせたボランティアもあった
（山陽新聞平成12年10月31日付）。ボランティア
センター開設は、阪神大震災で活躍し、日野町内で活動していた「神戸元気村のスタッフの千屋地区への訪問がきっかけとなった。窓口を通して組織的な活動の必要性を指摘、ボランティアセンター設置が提案された。同時に、神戸元気村スタッフは授権の要望について各戸への聞き取り調査を行った。
ボランティアセンター設置について、各情報機関を通じて周知したところ、岡山市、倉敷市などからも問い合わせがあった。千屋地域づくり推進委員会で登録されたボランティアは255名（県内外から160名、新見市阿部広域事務組合社会福祉協議会職員95名）、登録者以外にも消防団員156名、マッサージボランティア10名が活動を行った。ボランティアの受け入れについて「知らない人には頼みにくい」との声もあり、壊れた屋根のシート掛けや傾いた家の柱を掛けは主に地元の消防団に委任あるいは、家具類の整理などは親戚に手伝ってもらうケースも多かった。しかし、取り壊したあの瓦礫に崩れた石造の住宅などは人手や重機がないと難しく、高齢者世帯の多くは手つかずの状態であったため、地区として積極的ボランティアの受け入れが行われた。その他、ブルーシート掛け、瓦の運搬、解体作業からの荷物などの運び出し、会議室や一般家庭の片づけなどが行われた。また、新見高校の生徒、愛育委員や医療機関の看護師による訪問なども行われた。

3. 本学のボランティア活動のきっかけ
地震後早い段階から、市職員や市内外からのボランティアが出入りしたようだったが、特に屋根や石垣など住宅周辺の修理や道路整備などの必要度が高く、私たち短大の学生・教職員には役立つことがないのかと、気になりながら傍観をしていった。
約１ヶ月後、老年看護学実習の反省会を行っていた際に、「震災後の千屋の方々はどうされているのか」「仮設住宅に住んでいらっしゃる方は不自由な生活されているのではないか」「高齢化率の高い地域だから高齢者だけの世帯が多く、何か私たちの力が役立つことはないのだろうか」などの話題が挙がり、時間的に自由になる学生の一室と教員で訪問してみようということになった。訪問対象は、市の社会福祉協議会からホームヘルプサービスを受けている高齢者で短大からの訪問を承諾していた方とした。実際に訪問を始めるとき、まだまだ地震の爪痕は強く残しており、家の内の掃除や片づけが後回しになっている状態や、対象者の中には時折続く余震に不安を訴える方もいた。
高齢の方々が訪問を喜んでくださったこと、今後冬になってさらに生活上での困難を、健康上の問題が起こる可能性があること、まだ微弱な私たちにも役立つ援助があることを実感した。活動報告を通して学長から、「是非全学的な取り組みとして継続したらどうか」という助言があり、教授会の議を通じて全学的なサポートが得られることになった。
そのため看護学科だけではなく、第2期では幼稚教育学科の学生たちも参加し、第3期では地域福祉学科の学生、教員、そして幼稚教育学科の学生のふれあいサロンへの参加、およびメモリアルコンサートでは幼稚教育学科の安達雅彦教授の全面的な協力も得られた。
第3期はまだ継続中で2002年3月に第3期の予定を終了後、今後の計画について検討する予定である。

1）ボランティア活動の時期
表3のように震災後1ヶ月経過した時期に、高齢者世帯への訪問を行ったのが第1期である。第2期は2001年4月から4月にかけて高齢者世帯への訪問と、虚弱高齢者を対象とした新見市の保健事業の一環である千屋ふれあいサロンへの参加を行った。第3期は2001年5月から翌年3月までの長期計画を実施している。以下、その内容について述べる。

2）ボランティア活動の内容
(1) 高齢者世帯訪問活動
この活動のねらいは「千屋地区の被災高齢者の独居世帯、夫婦世帯を訪問し、健康状態のチェックおよび日常生活の援助を行いながら、主として
精神面へのサポートを行い、震災後の不安の軽減を図る」とした。
表4のように第1期では対象者5名、延べ訪問回数11回、学生ボランティアの延べ参加人数21人、教員の延べ参加人数12人であった。活動内容は、高齢者世帯への訪問で、対象者の希望に添いながら、健康観察、身体的ケア、家事援助などを中心に、余震の不安や健康上、生活上の問題についてゆっくり話聞くというきさかな援助であった。
第2期では対象者6名、そのうち1名は1回の電話連絡のみであったが、延べ訪問回数は12回、学生の延べ参加人数は18人、教員の延べ参加人数は21人であった。活動内容は第1期と同様であった。
第3期の前半では対象者5名、延べ訪問回数は17回、学生の延べ参加人数は25人、教員の延べ参加人数は22人であった。活動内容は第1期・第2期と同様に健康観察を主として家事援助を行った。
(2) 千屋ふれあいサロンへの参加

この活動のねらいは「千屋地区高齢者の介護予防事業として行なわれるふれあいサロンへの協力参加し、虚弱高齢者とその家族、地域ボランティアの方々との交流を深める」とした。
第2期から参加することになった千屋ふれあいサロンは、月1回千屋の虚弱高齢者とその家族、そして地域ボランティアの方々で運営されている新見市介護予防事業の一つで、午前10時頃から午後2時半まで様々な活動を取り入れて地域交流が図られている。参加者は約40名程度である。表5のように、第2期で2001年3月に1回、第3期で2001年7月と2002年3月の計2回に参加する予定である。第3期前半までの延べ参加人数は、学生ボランティアで18名、教員は5名であった。
第2期では、幼児教育学科学生が短大で学んでいることの一端を披露し、「皆さんのお孫さんたちに教えてあげてください」という呼びかけで手遊びなど楽しい時間を共有することができた。生徒たちの元気な踊りや歌で、笑顔いっぱいで終えることが出来た。
第3期の前半では、地域福祉学科の学生たちに

表3．千屋地区震災ボランティア活動の時期及び内容

<table>
<thead>
<tr>
<th>時期</th>
<th>期間</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1期</td>
<td>2000年11月7日～2000年11月13日</td>
<td>高齢者世帯訪問</td>
</tr>
<tr>
<td>第2期</td>
<td>2001年2月17日～2001年4月6日</td>
<td>高齢者世帯訪問 千屋ふれあいサロン参加</td>
</tr>
<tr>
<td>第3期</td>
<td>2001年5月10日～2002年3月19日</td>
<td>高齢者世帯訪問 千屋ふれあいサロン参加 メモリアルコンサート協賛</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表5．千屋ふれあいサロンへの参加

<table>
<thead>
<tr>
<th>参加日</th>
<th>参加スタッフ</th>
<th>活動内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2001年3月13日13:00～15:00</td>
<td>看護学科2年次生2名 幼児教育学科1年次生8名 看護学科教員3名</td>
<td>ゲーム 看護学科学生の表現披露</td>
</tr>
<tr>
<td>2001年7月17日13:00～15:00</td>
<td>地域福祉学科2年次生8名 地域福祉学科教員1名 看護学科教員1名</td>
<td>ゲーム レクレーションリハビリ</td>
</tr>
<tr>
<td>2002年3月19日13:00～15:00</td>
<td>未定</td>
<td>未定</td>
</tr>
</tbody>
</table>

－85－
よってレクレーションリハビリを中心にゲームなどで、盛りだくさんのプログラムで、暑い時期にもかかわらず参加者は一生懸命に身体を動かすことができました。どちらの参加者についても、帰り際には参加した高齢者が、学生一人一人に挨拶して「楽しかった」「また来て下さい」と声を掛けられ、学生たちも達成感や充実感を十分に得ることができました。

(3) メモリアルコンサート
この活動のねらいは「震災１周年を経過し、地域の人々の今なお残る痛みや不安を少しでも和らげざるを得ることのできる場を提供する」こととした。当初は高齢者を中心としたふれあいサロンや、高齢者世帯への出張コンサートを企画して、フルート奏者の安達雅彦教授に協力を依頼する計画を検討していたが、千屋市民センターとの協議の中で、10

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>月目</th>
<th>対象年齢</th>
<th>学生ボランティア</th>
<th>教員</th>
<th>援助内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>11月7日（火）</td>
<td>A</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、身体的ケア</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月7日（火）</td>
<td>C</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>検査観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月7日（火）</td>
<td>D</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>検査観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月9日（火）</td>
<td>B</td>
<td>3名（年3）</td>
<td>2名</td>
<td>家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月9日（火）</td>
<td>E</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、身体的ケア</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月9日（火）</td>
<td>A</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、身体的ケア</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月9日（火）</td>
<td>C</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月13日（月）</td>
<td>B</td>
<td>1名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月13日（月）</td>
<td>E</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、身体的ケア</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月13日（月）</td>
<td>A</td>
<td>1名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>身体的ケア</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月13日（月）</td>
<td>C</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2月17日（火）</td>
<td>A</td>
<td>3名（年1）</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、身体的ケア</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2月17日（火）</td>
<td>B</td>
<td>3名（年1）</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2月24日（火）</td>
<td>C</td>
<td>1名</td>
<td>電話相談</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2月24日（火）</td>
<td>D</td>
<td>1名</td>
<td>電話相談</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2月24日（火）</td>
<td>F</td>
<td>2名（年2）</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、介護指導</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2月24日（火）</td>
<td>G</td>
<td>1名</td>
<td>電話相談</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3月3日（月）</td>
<td>A</td>
<td>3名（年1）</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3月3日（月）</td>
<td>D</td>
<td>3名（年1）</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3月10日（月）</td>
<td>C</td>
<td>2名（年2）</td>
<td>2名</td>
<td>家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3月24日（金）</td>
<td>F</td>
<td>2名</td>
<td>検査観察</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3月26日（日）</td>
<td>B</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4月6日（金）</td>
<td>B</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月10日（木）</td>
<td>A</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、身体的ケア</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月10日（木）</td>
<td>B</td>
<td>3名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月10日（木）</td>
<td>H</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>検査観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月17日（木）</td>
<td>I</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月24日（木）</td>
<td>C</td>
<td>3名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月24日（木）</td>
<td>A</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>検査観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月24日（木）</td>
<td>B</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>検査観察</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日（木）</td>
<td>I</td>
<td>3名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6月5日（火）</td>
<td>I</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6月21日（木）</td>
<td>I</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6月28日（木）</td>
<td>B</td>
<td>2名（年3）</td>
<td>1名</td>
<td>健康観察、身体的ケア、家事援助</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7月25日（木）</td>
<td>A</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7月25日（木）</td>
<td>B</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7月25日（木）</td>
<td>C</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7月25日（木）</td>
<td>H</td>
<td>2名</td>
<td>検査観察</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7月25日（木）</td>
<td>I</td>
<td>2名</td>
<td>健康観察、家事援助</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

計 10回（2人世帯）、6名、計 55名
月6日の震災一周年に美しい森でのイベントに協賛することになった。

当日は午前中に記念植樹、メモリアルウォークなどが催され、午後にメモリアルコンサートが実施された。地元の小学校の児童、保護者ら、参加者は約300人（備北民報発表）であった。短大からは安達雅彦教授（フルート）吉村淳子講師（ピアノ）による演奏が披露された。その他2クラスの演奏があり、和やかなひとときを過ごした。

ボランティアグループとして、事務局長、教員3名、学生8名が参加し、訪問活動の対象者の中一人も当日、お祝いすることができ喜んでいただいた。

V. 今後の課題

今回の震災は、私たちに多くの教訓と課題をつかせた。まず1つはボランティア開始の時期は早い方が良い、また、2つめにはそれは継続することである。

1. ボランティア活動を早期に開始することの意義

1）生活の場を早急に確保する

千屋地区の地震による被害は大きかったが、本学も含め新見市中心部の被害は大きくなかった。短大においても、週明けには普段通りの講義が開始され、すぐに立ち上がり取ることことができた。震災後、千屋地区の被害状況は周知されていなかったため、本学のボランティア活動は震災後1ヶ月を経過しての開始となった。独居世帯などでは、まだ充分な片付けや掃除が出来ておらず、ガラスが破れ散乱しており、閉じ込められた状態であった。しかしこれは、特に高齢者では片付けもできず、また「何をする気もありません」という意欲が矢口に詰まっていた。活動開始後、ボランティア活動をするための組織を早急に立ち上げる必要性が самостояされると痛感した。

早急に活動が開始されることによって、生活空間を早期に再建の状況に戻すことができ、生活意欲の回復も早く得られると考えられる。

また、避難所の情報を3日後に初めて知ったということもあり、特に独居高齢者では情報から取り残される危険性が考えられた。今回の様に地域全体が被害に遭うという状況では、自分の家族の安全を確保することが優先され、地域の支え合いは充分には発揮されにくいと考えられる。実際に震災当日に高齢者世帯を訪問予定のホームヘルパーさんにも2回災害を考えて訪問を中止するように指示があったと聞いた。地域の支え合いが充分に発揮されにくい時だからこそ、外部からのボランティアが介入し、バイブ役としての役割もあるのではないかと考える。

2）ライフライン以外の生活環境の整備

震災1ヶ月後の活動開始当時、生活環境で一番気になったのは隣の破れであった。横揺れ破壊で左内の様に破れた障子は悲惨な状況であった。瓦窓等に手が取れ、障子はどうしても後回しになり、ボランティアの手が届きにくい援助だったのではないか。厳しい冬を待つ時期であり、障子補強は PX 等の紛議と簡単な環境対策である。また、千屋地区は豪雪地帯であるため、冬場に雪だるま第2期では雪かきなども重要な環境対策であり、ボランティアによるサポートが可能であったと考える。

震災から1ヶ月目の活動開始時には、根太の修理が必要なため調査を上げているなど、震災の余波があり、被害のなかった、あるいは少なかった部屋を中心に生活をされている状況にあった。ライフラインが整備された後でも、震災前に比べて狭い空間のなかでの生活をされていることがわかり、ライフライン以外の生活環境を整備する必要性が示唆された。

第1期・第2期では、障子の補修や根太の修理後の落さきや掃除を行ない、生活空間の拡大を目的した。第3期では、室内的清掃や他はきなどを行ない、生活空間・環境の維持を目指した。震災以前の生活を取り戻し、より快適な毎日を送るよう手伝いができたこと、思いを存分に活動であった。訪問回数を重ねることによって、高齢者の健康や生活に関する情報を得られた。健康の維持も視野に入れて生活環境を整備することの必要性も感じられた。生活空間の拡大と生活環境の回復の
状況に応じて、援助内容も変化させていくことが必要であった。

2. ボランティア活動を継続することの意義
1) 見守られている安心感を提供する
ボランティア活動には時間も人手も限界があり、時には様子をうかがう電話や手紙などのさまざまな活動になることもあった。しかし、「ボランティアの訪問をしてもらうようになって、以前にも増して新鮮が好きになった」という声をいただいた。気をかけてくれているというボランティアの存在は被災者にとって「いつもも見守られていく」という安心感を与えられる。しばしば連絡が取れるような関係作りができれば、安心感は提供できるのではないかと考える。

高齢者の方々、訪問日カレンダーに書いて覚えておき、訪問時間に手紙に置いて出してください。訪問を心待ちにしていただいている。「今日は訪問の日だから仕事も行った」「今日は何をお話しようかと考えながら過ごしていた」と話される高齢者もある。安心感と同時に、高齢者の生活にいまいち活気を提供できる活動でもあったと考える。

2) 被災体験を聞く
誰かと話してもらうことで、被災者はその恐怖体験や不安感を吐き出し、気持ちを整理することができる。第1期では震災時の怖かった思いをほとんどの方が語られた。「でも、頑張った」「起きたことはしかない」と自らを励ます様に言葉を続けられる。誰かと話することで自分自身を取り戻し、自らを鼓舞する効果をもたらす。被災者の心のうちにある思いをじっくりと聞く存在が必要である。

寝たきりで言語障害があり要介護状態の夫と、その夫を取扱的に介護している妻の高齢者夫婦が被災者への訪問も行った。妻が勤仕事をしていた時地震が発生した。夫が心配で家の中に掛けこもると、その夫は、「自分のことは良いから早く家の中に出ろ」と手振りで一生懸命伝えたと言う。言葉も出ず、日常生活を全て妻に委ねている夫が、精一杯の思いやりを妻に示したのだった。その話を数日後に訪問したヘルパーに不安や恐怖と共に夫婦の絆を確認した感動の涙で語られたと言う。不安や恐怖の中、家族や夫婦がどのような思いで、どのような行動を取ったのか、しっかり聞くことは体験を共有しカリキュラムに繋がる援助になり得ると考えられる。

震災から既に1周年を迎え、今後の活動の方向性として、再度1年前の被災体験を聞くということを計画している。災害時の家族の行動を振り返る事で、今後対策時にどのような援助が可能かを考えたい。

おわりに

鳥取西部地震による千屋地区の被災は、現在1年が経過しようとしている。表面的には震災前の平穏な生活に戻り、ボランティアの必要性はなくなったかのように思える。しかし、高齢者世帯への訪問やふれあいサロンで地域の高齢者の方々にお会いする度に、私たちのささやかなボランティア活動を喜んでいただき、待っていたといえる。ボランティア活動を通じて私たちが学び、励まされるという関わりを継続している。

最後に、私たちを受け入れ、心持ちにして下さる千屋の高齢者の方々に心から感謝し、また、活動を支援し協力して下さった関係機関の方々に深く感謝致します。

引用・参考文献
2) 年齢別人口統計表、平成12年10月31日現在、岡山県新見市。
5) 前掲4)
6) 前掲1)
7) 鳥取西部地震災害に係る生活支援対策等について、平成13年3月5日現在、新見市企画総務部総務課。